

仏教は心の世界遺産 1

竹村 牧男・東洋大学学長

2014年11月25日
NHKラジオ
明日への言葉

1948年生まれ 66歳 40年以上に渡って仏教の研究を続け、日本を代表する仏教学者のおひとりです。

高校時代から日本の文化の背景に在る仏教に興味を持った竹村さんは、東京大学文学部インド哲学科に進学、学生時代は座禅修行に打ち込みました。その後文化庁の専門委員、筑波大学教授を経て、現在は東洋大学の学長を務めています。

子供時代は凄く貧しい家でした。4つの時に父が亡くなり、母が働いて私たち4人の子供を育ててくれました。仏教に興味を持ったのは、高校の国語の試験で唐木 順三の文章が出た時でした。凄く美文調で非常に心に残る文章だった。それから唐木 順三の本を読んで、道元、一遍とか、また様々な思想を学んだ。岡潔の書物を読んで、すごく感激した。

心の問題とか、日本的な伝統の事、仏教の事を非常に熱く語っていて、心に響いた。岡潔は道元とか、弁栄上人(浄土宗 光明主義を唱える)の念仏を实践された方です。念仏を唱えて精神統一されて、そして数学の困難な問題を解かれたと言っても過言ではない。仏教を勉強したいと思って、と言うことで東京大学の文学部に入って、インド哲学科に入った。駒場で坐禅のサークルに直ぐに入った。

毎月13日に中川 宋淵老師が来られて法話を聞いたり坐禅をしたりした。秋月 龍珉先生が禅の私塾を開いていることを知って、神楽坂に通う様になった。これが基盤に成っていると思う。秋月 龍珉は日本の禅を世界に伝えた鈴木大拙に教えを受けられた方。坐禅 調身調息調心 身体を整え、呼吸を整え、心を整える。心を整える時には、緩やかに整えた呼吸を心の眼で見つめる。心を集中してゆく、統一してゆく、そして三昧に入る。(精神統一された状況)

数息観→静かに自分の息を勘定する修養の方法大学を出て出版社に務めたが、或る先生から手紙が来て、戻ってこないかと言われて、大学に戻って研究する事になる。

博物館、美術館で仏像展をすると、凄く賑わう。意識しなくても、意識しなくても、仏教の世界観、宇宙観とか、そういうものを呼吸しているのではないかと思う。文化の中にそういったものが浸透して行って、知らず知らずのうちにそういうものの見方、考え方になじんでる。大きく 大乘仏教(密教も入る)、小乗仏教(東南アジア等に広がっている)に分けられる。日本の仏教は大乘仏教ですが、修行方法でかなり多様に分かれている。念仏、題目を唱える、坐禅など 行、ないしは信仰の信内容によってかなり宗派的に別れている。インドから段々に伝わってきて発展するが、発展した最後の形態が伝わっているので、非常に高度な仏教が日本には残されていると同時に末法思想があるが、お釈迦様の時代から離れるほど人間の能力の衰え、社会も濁ってくる。

修行方法が用意されているが、修行もなかなか出来ない、その修行ができないものがいかに救われるのかというのが日本の仏教の課題になっている。深い簡単な形で救われる道がいくつも用意されている。日本仏教の独特な特徴だと思います。

唯識 世界は心が表しただけだという、考え方の思想があるが、実はこれが大乘仏教の共通の世界観になっている。唯識の思想は非常に精緻な論理的な体系で語られている。如来像思想 皆本来仏であるが、無明、煩惱に覆われていて

それを自覚出来ない。発展した高度な教理を受け継いでると言うところに、奥深いものがある。唯識 世界は自分の心が表しただけだという、外界にそのものとしての本体、あるものがあるわけではないという考え方。例えば机、見える姿形として無いわけではない。机、本体はあるか、ばらせば机ではない、燃やせば無くなるわけで、机と言う本体がある訳ではない。言葉を使う事で無意識のうちに言葉に見合う、なんかそういうものがあると、永遠不変なものがあると、つい思ってしまう。日常的にはそう思い込み、執着し、苦しんでいると言う様な事がある。自分と言う存在もそう、自分と言う本体があると思こんでいるが、本当にあるのかという問題になる。かけがえのない主体が発揮されているが、常住(永遠不変なこと)なる自我があるとは言えない。

般若心経で「色即是空 空即是色」 本体は持たないけれども、現象としてあるという意味合い。空であるがゆえに色として成りたっている。色は物質的な現象の事を意味する。「受想行識 亦腹如是」 唯識は、我々があると思っているものが実は映像にすぎない、心が表しただけのものにすぎない。心を、我々が自覚していない心の世界がある。五感の感覚、意識、判断、未来のことを思ったり、過去の事を思ったりする、意識のさらに奥に末那識があり、更に奥に阿頼耶識がある。末那識は常に自我に執着している。寝ている時の末那識が働いている。夢は第六識の世界。阿頼耶識は過去一切の経験を貯蔵している世界だと言われる。(無意識の世界) 生じては滅し、生じては滅しながら相続されている。その上に生死輪廻が行われている。六道輪廻 地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上 生死輪廻は阿頼耶識の上に、それまでおこなった行為の情報が蓄えられて、その行為の善なる性質、悪なる性質によって、次の世にどこに生まれるかが決まってくるという。阿頼耶識の中に世界に生きる個体、人間界なら人間界と言う世界と、人間としての個体が、阿頼耶識の中に又一定期間現れる。寿命がくるとそれが消えるが、阿頼耶識は相続する。また次の世の世界と生き物になる。

人間の存在は八識から成り立っている。(眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識・末那識・阿頼耶識) 八識の中に人間としての世界も人間としての身体もある。瑜伽行(ゆがぎょう)派と言う学派に於いて形成された。自我に執着してとらわれ、物に執着してとらわれ、苦しみが生じている。それを如何に越えて、しかも本来の命を如何に発揮するか、其れを導くために世界はこうなっているんですよ、だから執着している、いわれないことでしょうか、意味のないことでしょうか、そこから解放されてくださいと、そういう意味で造られている。自分とは一体何なのか、昔の人もそれを一生懸命追求してきた。今の人の方が外のものばかり眼が奪われて、外のものばかり追いかけて、自分を見失っているのではないかと。